

**課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（学術知共創プログラム）
研究概要**

課題

C：新たな人類社会を形成する価値の創造

研究テーマ名

人間・社会・自然の来歴と未来：「人新世」における人間性の根本を問う

責任機関

国立大学法人東海国立大学機構

研究実施期間

令和4年6月～令和10年3月

研究プロジェクトチームの体制

研究代表者等の別	氏名	所属機関・部局・職名
研究代表者	中村靖子	名古屋大学・大学院人文学研究科・教授
I 理論班		
グループリーダー	中村靖子	名古屋大学・大学院人文学研究科・教授
分担者	大平徹	名古屋大学・大学院多元数理科学研究科・教授
分担者	田村哲樹	名古屋大学・大学院法学研究科・教授
分担者	鈴木麗瑩	名古屋大学・大学院情報学研究科・准教授
分担者	平田周	南山大学・外国語学部・准教授
分担者	金信行	東京大学・学際情報学府・後期課程
II 人間と自然との相互 関係史		
グループリーダー	岩崎陽一	名古屋大学・大学院人文学研究科・准教授
分担者	伊東剛史	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
分担者	立花幸司	千葉大学・大学院人文科学研究院・助教
分担者	森元斎	長崎大学・多文化社会学部・准教授
分担者	高橋英之	大阪大学・基礎工学研究科・准教授
III 言語獲得と主体化プ ロセス		
グループリーダー	南谷奉良	京都大学・文学研究科・准教授
分担者	和泉悠	南山大学・人文学部・准教授
分担者	池田慎之介	京都先端科学大学・人文学部・准教授
分担者	長井隆行	大阪大学・基礎工学研究科・教授
IV セクシュアリティの 多様性		
グループリーダー	鳥山定嗣	名古屋大学・大学院人文学研究科・准教授

分担者	ボーヴィウ マリー	明治学院大学・文学部・准教授
分担者	立木康介	京都大学・人文科学研究所・教授
分担者	坂口菊恵	大学改革支援・学位授与機構・研究開発部・教授
V生政治とアート グループリーダー	武田宙也	京都大学・人間・環境学研究科・准教授
分担者	池野絢子	青山学院大学・文学部・准教授
分担者	山本哲也	徳島大学・大学院社会産業理工学研究部・准教授
分担者	大平英樹	名古屋大学・大学院情報学研究科・教授

配分（予定）額

（単位：円）

令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
19,136,000円	19,086,600円	19,086,600円	19,086,600円
令和8年度	令和9年度		
19,021,600円	19,021,600円		

※令和5年度・令和6年度・令和7年度・令和8年度・令和9年度については予定額

研究目的の概要

近代以降の人類の活動は環境に深刻な変化を与え、「人新世」という新たな地質年代の名称が提唱されている。同時に国家間の地政学的対立、民主主義と権威主義の葛藤、人種や性多様性に関する人権問題、巨大企業による富の独占と経済格差などの社会現象が生じている。この現状を打破するには、18世紀以降の、同一性を持ち自由意志に基づいて行動する近代的個人という人間像を根本的に問い直し、これに代わる新たな人間・社会・自然のあり方を探求しなくてはならない。そのために、豊穡な人文知を経験諸科学と連携させ、人文学が先導して課題解決に向かうべきである。本研究は、ブルデューのハビトゥス論と、ラトゥールのアクターネットワーク理論を理論的基盤とする。ハビトゥスとは、社会集団に共有され受け継がれる思考や行動の無意識的な習慣である。個人や国家などの振舞いも、ハビトゥスの束として捉えることができる。アクターネットワーク理論は、動物やモノや概念などの非人間を、人間と同様に、作用を及ぼすアクターとして捉え、その機能を概念化し分析する。この理論を用いることにより、人類の歴史を、人類が獲得した言語、道具、技術、動物をも含むコスモロジーとして捉え直すことが可能となる。しかし、これらの理論は本来独立に提唱されており、またアクターネットワーク理論は抽象的で一般化が困難である。以上を踏まえ、本研究はハビトゥスという観点から人間の内部構造を考察し、そうした内的モデルをもつ人間や動物、モノ、概念の巨大なネットワークを〈他者や自然との柔らかな均衡〉として描出する。そのためにこれらの理論の精緻化を図ると共に、アクターネットワークの振舞いを数理科学的モデルにより表現し、作動メカニズムの記述と、コンピュータ・シミュレーションによる社会の諸事象の可視化や予測を試みる。さらに「自然と人間の相互関係史」、「言語獲得と主体化のプロセス」、「セクシュアリティの多様性」、「生政治とアート」という重要なテーマについて、上記の概念的枠組みと方法論に立脚しつつ、それぞれの問題に関する仮説群を設定し、人文社会科学的及び自然科学的な視点と方法の協働により、それらを検証する。こうした試みは人文学の価値を再提示すると共に、学際科学のモデルとなりうる。これ

により統合的な人間・社会・自然の姿の理解を目指し、新たな人間・社会・自然のあり方を提示する。

研究計画の概要

現代の人間・社会・自然の危機を克服するためには、人間の来歴とありうべき姿を、人文知に基づき問うことが必要である。本研究は理論を担当する研究班を中心として、4つの研究班を設置する。理論班は、問題を分析する概念的枠組みと方法論を各班に提供し、各班で得られる研究知見によりその妥当性を検証する。各班に人文社会系と自然科学系の研究者を配置し、学際的な共同研究を行う。また統括班を置いて、各班が連携して研究を推進できるよう支援する。第1班は「理論の構築」を担当し、ハビトウス論とアクターネットワーク理論を精緻化し統合を図ると共に、数理モデルによりそれらの理論の定式化を目指す。この成果から各班に共通の理論的枠組みを与えて連携を実現する。第2班は「自然と人間の相互関係史」を主題とし、1)古代インド、ギリシアから現代までの自然との関係をアナキズム視点から俯瞰し、2)19世紀以降の動物と人間との関係史、3)近代都市の誕生から宇宙開発までの人間の居住空間を、ハビトウス論とアクターネットワーク理論を用いて検討する。第3班「言語獲得と主体化のプロセス」は傷つきやすさ及び痛みを、人間性の重要なコンセプトとし、文学、言語哲学、発達心理学、ロボティクスの研究者が協働して、個人の主体化における脆弱性の意義を追求する。具体的には、脆弱性を実装した人工知能による言語獲得実験、幼児の言語習得過程の観察、文学作品における痛みの表現のテキストマイニングを用いた分析や、心理的に痛みを与えうる表現の意味論・語用論的解析を行う。第4班は「セクシュアリティの多様性」を生物的な性と、ハビトウスとしてのジェンダーから検討し、1)文学によるセクシュアリティの創発・定型化・攪乱、2)性と宗教との関わりと制度化、3)近代科学による性のカテゴリー化について、文学、精神分析、認知神経科学から統合的に考察し、性の再概念化を目指す。第5班「生政治とアート」は、生を管理する権力(生政治)を理論的に考察し、それに抗する企てとしての芸術活動に着目する。特に、生の再創造を試みるバイオ・アートが喚起する人間の姿を、人間の未来像として分析する。またエスポジトの生政治=免疫論に想を得た心理学的な調査、日常生活における個人の感情や生理反応を連続的に記録する実験を行い、パンデミック後の世界における人間の倫理とあり方を問う。